

修 飾 に つ い て

高 崎 みどり

修飾とは、どんな働きをいうのか、ということについて、連用修飾・連体修飾の2つの面に分けた上で、考えてみたい。

1

まず、連用修飾において、修飾語と被修飾語の間にみられる種々の関係について考えてみることにする。連用修飾の関係で、修飾語の側に立つとされるものは、きわめて種類が多い。こころみに塚原鉄雄氏が、その外延として示されているもの（注1）を見ても、9種18類に及んでいる。そこには、活用する自立語（動詞・形容詞・形容動詞）のみで構成される場合と、それらに助動詞連用形、格助詞、接続助詞の各々が接続して構成される場合、そして活用しない自立語（名詞・副詞）のみで構成される場合と、それらに助動詞連用形、格助詞の各々が接続して構成される場合、また、「一文として完結しうる表現」に助詞「と」、接続助詞が接続して構成される場合、これらが網羅的に示されている。外延として示されているものを見ているかぎり、整然としているように感じられる。

一般に「連用修飾語」というと、「文の成分」であるところの「主語・述語・独立語・接続語・修飾語」のなかの「修飾語」に属する文の成分のうちの「連体修飾語」でない、用言を修飾する修飾語、という程度の認識しか私にはなかったが、これでは連用修飾語は多くの未整理な構文上の働きをもつもののかかえすぎるのだという。それゆえ、渡辺実氏は、連用修飾語を、「連用成分・並列成分・接続成分・誘導成分」の4つに分けられたのである（注2）が、北原保雄氏は、更にこの「連用成分」を、「補充成分」（花が咲く。フランス語の本を読む。の一部の類）と、「連用修飾成分」（美しく咲け。静かに読むから頭に入るのだ。の一部の類）の2つに分けることが必要である、とされる。（注3）このような考え方は、用語や概念は多少異なるが、山田孝雄氏や、三上章氏、時枝誠記氏もとるところである、という。これにしたがえば、先述の外延からは、名詞に助詞が接続した場合は、連用修飾成分としては除かれることになるだろう。

私も、「連用」ということと、「修飾」ということは、分けて考えるべき

であると考えるのであるが、すると結局、「修飾」とは何であるのか、ということが、問題になってくる。

2

「修飾」とは何か。文法用語としての「修飾」或は「修飾語」についての説明としてはまず、「種々の文の成分の概念内容を修飾限定するもの」(注4)、また「意味の増加」「意味の漠然たる点をどんなであると決定しはつきりさせる事」「意味を委しく定める事」(注5)といったものがあげられるが、「意味の増加」があればあるだけ、そうではない意味、捨てられた意味も堆積するわけで、より狭められた限定となるわけである。

また、修飾語は必ず被修飾語を必要とするわけであるから、「他の語に係る」という点に注目して、「独立」に対する概念としてとらえる考え方もある。(注6)しかし、これは「修飾」の概念の説明というよりむしろ、「連○(連用・連体)」に注目した場合で、機械的な「かかり一かかられ」の関係で構文を処理する場合はいいのだが、「修飾」という概念の説明のためには、もう少し意味内容にまで立ち入った、表現論的な見方(注7)が要求されるのではないかと思われる。それにこたえたものとしては、たとえば文体論的観点から、「修飾するのは限定するのではなく、具体化すること」「「修飾」という機能は、文法学的にでなく表現的なみかたからすれば、いわゆる被修飾の位置にある事象の具体化である」「具体化がすすめばすすむほどすぐれた修飾である」「この具体化は、思考というような抽象作用に訴えるよりも感性に訴えるもの」というような見方が提出されている。(注8)

「限定」といい、「意味の増加」といい、また「具体化」といい、単にみかたの角度のちがいにすぎないのかもしれないが、それにしてもそういったことがらは、実際にはどのような姿で現われているのであろうか。そして表現論的には、「修飾」ということはどのようにとらえられるのであろうか。

3

まず、連用修飾についてであるが、先述のような理由で、名詞によって構成されるものは除き、また連体修飾語における場合と比較しやすくするために、一方にしか働かない副詞によるものを除き、そして動詞の連用法というのは現代語ではあまり多くないといわれるのでそれも除くこととする。そしてできるだけ純粋な形で連用修飾というものをみるために、形容詞を中心に

形容動詞も含めて、それらの連用形による連用修飾だけでまず考えてみようと思う。形容詞・形容動詞は、終止形が述語となって使われる場合も少なくないが、主たる機能としては、名詞・動詞にかかる連体、または、連用修飾語としての働きがまずあげられる品詞であると思われる。

さて、形容詞・形容動詞の連用形による連用修飾語としては、たとえば並立の成分となるための連用形（赤く、大きい花、の一線の類）や、否定・状態性・動作性を表わす形式用語に連なる連用形（赤くない、元気になる、細くする、の一線の類）等々は除かれるものとする、形容詞・形容動詞の連用修飾語は、その対象を大部分動詞とすることになろう。つまり表現的にみると、その連用修飾のありかたは、動詞の意味内容へのかかわり方にあると考えてよいだろう。ゆえに、形式面でなく、内容の面で、個別に詳細に検討してゆくことが必要となってくる。

たとえば、次のような例を考えてみよう。

例1. しばらく会わないうちに、彼の境遇は大きく変わっていた。

例2. 天気が良かったので、朝早く、家中の汚れ物を洗濯してしまった。

この2つの例文で、「大きく」「早く」の動詞意味内容へのかかわり方をみると、直接その動詞の内容に干渉しているのは「大きく」の方である。

「早く」の方は動詞の内容そのものでなく、動詞の内容の成立する際の外的条件とでもいうべきものとして働いている。即ち、「（朝）早い」ことと「洗濯する」ことは各々別のことである。それに比べて「変わる」その程度が「大きい」のであるから、この2つのことは別々のことではないし、その動詞の内容に、何ら外的な意味をつけ加えることがないのである。この違いは個々の形容詞・形容動詞の語彙としての差に基くものではなく、（たとえば「早く」を「迅速に」の意味で、例1のような動詞にかからせることができる）、対象となる動詞とのかかわりによって、直接か間接かが決まってくるのであろう。しかし、程度性をもったものは、直接、動詞にかかりやすいのではないか、と予想される。

例3. 彼女は充分に満足していた。

一方、「ない」のような形容詞は、これだけでは意味をなさず、「何が」という語・概念を前提にするので、動詞へのかかり方は間接的になりやすい。「同じ」「逆だ」などのような形容動詞もそうであろう。

例 4. 予想がはずれて、声もなく立ちすくんだ。

また、感情・感覚を表す場合などで、

例 5. 富士山が真白に見えた。

例 6. 私はその知らせをきいて、悲しく思った。

のような例は、見えたこと、思ったことの内容を言っているので、いわば引用のようなものとも考えられ、動詞とのかかわり方は、より間接的であろう。

一方、程度性を以てかかわる場合ほど直接的ではないが、たとえば、

例 7. 彼の住居は、都心から遠く離れた郊外にある。

例 8. 夕陽が空を薄赤く染めている。

のような場合にも、動詞とのかかわりは緊密といえよう。即ち、動詞と形容詞の意味内容は一部分重なるところを持ち、「離れる」という概念には「遠い」という概念が容易に含まれうるし、「染める」という概念に色は容易に含まれうるのである。

この直接・間接という区別は、峻別しうるものではないかもしれないが、形容詞・形容動詞の動詞へのかかり方には、意味の上で濃淡があるということはいえよう。

動詞へのかかわり方が直接であれ、間接であれ、そこに共通してみられるのは、形容詞・形容動詞が、動詞のもっているさまざまな面のうちの1つの側面をとり出して提示していることになる、ということである。つまり、動詞であれば、その動詞の有する意味内容には辞書的意味のみならず、たとえば、時間・程度・主体・目的・対象……に関する面が、潜在的可能性としていくつも含まれているわけである。形容詞・形容動詞は、そのうちのいずれかをとり出し提示しているのである。であるから、たとえば「限定」ということも、形容する側からの一方通行でなくて、動詞もまた、それが修飾されるべき形容詞・形容動詞をえらび、そして「限定」している、といえないだろうか。

また、表現する側からいえば、形容詞・形容動詞を動詞の潜在的可能性の中から関連づけて選び出すことになるし、理解する側からいえば、動詞の意味内容への干渉の度合をはかりながら、そのときのその動詞の伝える内容を変容させてゆくという過程をたどることになる。動詞と形容詞・形容動詞は互いに干渉し合っているように思われる。

修飾語と被修飾語ということを考える場合、修飾語が被修飾語に従属するという構文論的解釈があるが、表現論的に見れば、両者は対等であり、相互的であるように思われる。そして例5.6のような文例を見ると、意味のウエイトは、「見えた」か「見えなかった」かでなく、「どんなふうに」「白く」の方にあるようだし、「思った」か「思わなかった」でなく「悲しい」方に力点がおかれているようにすら思われる。

そしてたとえば、潜在的可能性としても含まれにくいと思われる形容詞・形容動詞が選ばれている場合には、文学的表現として新鮮な面白さを感じるか、あるいは誤用として奇異に感じられるかなのである。

例9. ※灰色の雲が空を冷たく染めていた。

のような使われ方の場合、「染める」という動詞の種々の面のどの要素を考えても、温度に関する概念は出て来るとは思われぬ。いわば意味関係が断たれているように思えるが、形の上から両者が結びついていることとして受けとらされることにより、理解する側は、そこに結びつきを見出そうとして、想像力の助けを借りる。この緊張感、文脈を追うことの中断が、各々の言葉をじっくり探らせ、味あわせることになるし、それは快いものではあるが、ひとりよがりすぎれば、誤用になってしまうのである。

形容詞・形容動詞の連用修飾を、表現する側からみると、動詞の意味内容のうちのどの側面を選び、強調したいか、を託していることになる。動詞は名詞とともに、どちらかという客観的な判断・認識を示す品詞と考えられ、それに対して形容詞・形容動詞は主観的な面がより強い品詞だからである。情報の骨格としての動詞についてのどの側面を表現したいのか、という姿勢があきらかにされ、それと同時に、形容詞・形容動詞の方も、動詞によってものやこととして具体化し、文脈の中で意味をもってくるのである。

4

連用修飾のところでみた動詞へのかかわり方、つまり、個々の場合でかかわり方の親疎について差異があり、また意味の範囲の“限定”は相互的なものであり、動詞のある側面をとり出し、強調したい、という表現意識に基いている、ということが、連体修飾においても、名詞との間でみられるのかどうなのかということを次に検討してみたいと思う。

その前にまずその外延は、先述の塚原鉄雄氏が同じく示されており、やはり活用自立語の連体形、格助詞「の」が接続して構成される場合、連体詞などを含めて、7種15類に及んでいる。ここでもやはり、形容詞・形容動詞の連体形と名詞のかかわり方についてだけ考えてゆこうと思う。

連体修飾は構文論的にみても、連用修飾よりは単純であるらしくそれほど問題にはされていないようなのである。そして形容詞・形容動詞の連体形をみてゆくにあたって、除外せねばならないものも見当らないようである。しかし、連用修飾のところでも、動詞へのかかわり方の濃淡のようなことや“限定”の相互的であることなどは、名詞を対象とした連体修飾においてもやはり見られるのである。以下簡単に見てゆくと、

例1 0. きつい労働のために彼の手は節くれている。

例1 1. その横顔に、印象の強烈な、暗い影が走った。

例1 0.のように、直接、名詞の意味内容に程度としてかかわってゆき、「きつい」ものは、「労働」である場合に対して、例1 1.は、「強烈な」ものは「影」ではなく、その名詞の意味内容に対して外的な存在（「印象」）とまず結びついて、複合形容詞のようになってかかってゆくのである。そして程度性をもった形容詞・形容動詞が直接名詞にかかわりやすいのも、「ない」などが間接的になりやすいのも、連用修飾の場合とほぼ同様と思われる。ことに「ない」の場合は、「あられない」「立場がない」など、既に複合形容詞化して一語のようになっているのも少なくない。

また、感情・感覚を表す場合は、名詞をその対象としてかかわってゆくかかわり方が見られる。

例1 2. 叔父は淋しい後ろ姿をのこして去って行った。

これは、「淋しい」のは表現主体の気持、心であり、そのような感情の契機、対象となっているのが「後ろ姿」である。これも名詞に対しては間接的なかわりといえよう。

そして連用修飾における例6.例7.のように、「暗いかげ」「絶望的な気持ち」「そうぞうしい音」のようなかわり方、即ち名詞と意味内容が相互に一部重なるところを持っている場合もあるのである。

このように、連用修飾でみられることがらを連体修飾において名詞とのかかわりを見てみると、そっくり平行移動でもするように、あてはまる場合が

多く見られるのである。つまり、名詞の潜在的可能性としてある種々の意味内容、側面のいずれかをとり出して提示しているのが形容詞・形容動詞であり、表現する側からすれば、無意識にせよ、意識的にせよ、とり出して強調したい側面・意味内容なのである。そしてたとえば、

例 1 3. たそがれの空気には、ほの青い憂愁がひそんでいる。

などという時、「憂愁」といふ気分の意味内容のどこにも色彩という要素はないのだが、この2つを既に在る結びつきとして提示されていれば、受け手はそれとして受けとめ、文学的想像力を使って解釈をこころみることになる。その結果、「憂愁」に新しい意味が加わり、そして「ほの青い」にもまた新たな意味が加わることもあるのである。それはこの表現が成功したことを意味している。

5

形容詞・形容動詞と動詞・名詞とのかかわり方、という限られた範囲ではあったが、その中で表現論的にとらえられた「修飾」という概念は、客観的な面の強い名詞・動詞の有する意味内容に対する表現者の姿勢とでもいうべきものである。そして表現の受け手は、2つの結びつきを、既に与えられたものとして受けとり、文脈の中で、動詞や名詞を変容させながら、またそのことによって形容詞・形容動詞をも変容させながら、読み取り、味わってゆくのだ、ということではないだろうか。

次の段階としては、他の連用修飾語、連体修飾語全般をみてゆかねばならないのだが、その前に、形容詞と形容動詞をいっしょにして扱ってきたので両者の間に何らかの差異が見られないかどうか、ということをしらべる必要を感じている。また、形容詞・形容動詞の連体修飾と連用修飾を共通のモノサシで測ってきたわけだが、連体と連用では異なる面もあるはずで、それも確かめねばならないだろう。

注

1. 「修飾語とは何か」(『品詞別日本文法講座、第5巻』明治書院)
2. 『国語構文論』(明治書院)
3. 『国語学』 「渡辺実氏の連用成分についての再検討」 95 輯
4. 『国語学大辞典』の北原保雄氏担当の「修飾語」の項
5. いずれも橋本進吉著『新文典別記上級用』より

6. 注 1.の塚原氏の論文

7. 「表現論的」ということばは、まだきちんと定義されたことばではないが、形式より内容を主とし、抽象的にでなく、実際に表現されたものを頭において考えていくいかたで、個別的な表現や表現意図、そしてそれらの受容を重視しようとするものである。

8. 桑門俊成著『国語文体論の方法』（明治書院）

（文教大学教育学部講師）